



ペットボトルが原料のリサイクル繊維を用いたユニクロのシャツ

## 合成繊維大手

### 環境配慮型素材の開発強化

合成繊維大手が、環境配慮型素材の開発を強化している。東レは、使用済みペットボトルを繊維の原料に活用する取り組みを加速。帝人は、海洋プラスチックごみになりやすいフリースの代替素材に力を入れている。消費者の間で環境への意識が急速に高まっていることが、各社の開発を後押ししている。

#### 異物除去新技術で品質向上

東レはこのほど、回収した使用済みペットボトルから高品質の繊維を量産する技術を確立。併せてリサイクル繊維の新ブランド「&+ (アンドプラス)」を立ち上げた。2020年1月から展開し、リサイクル繊維を使った衣料品にブランドの

タグを付ける方針だ。

ペットボトルが原料のリサイクル繊維自体は以前から存在している。ただ、ペットボトルを回収する段階で異物が混入すると、細い繊維の生産が難しくなるほか、黄ばんで糸の白さが確保しにくくなる。そこで東レは、高い洗浄技術を持つ協栄産業（栃木県小山市）の協力を得ながら、特殊なフィルターで異物を除去する手法を確立。品質が向上し、ユニホームや作業着に限られていた用途は婦人服やスポーツウエアなどに広がった。

同社によると、日本とタイ、マレーシアで量産体制を確立済みという。リサイクル関連事業の売り上げは現在、15億円程度にすぎないが、25年までに500億円

## 消費者の意識向上が後押し

を目指す計画だ。

東レは、これ以外にもペットボトルリサイクルを手掛けている。9月16日には「ユニクロ」を展開するファーストリテイリングと、20年春からリサイクル繊維でTシャツなどを生産すると発表。同年秋にはユニクロの店頭で使用済みダウンジャケットを回収し、取り出した羽毛を素材に活用した商品売り出す取り組みも始める計画だ。ロンドンで行った記者会見でファストリの柳井正会長兼社長は「地球が継続できないとビジネスができない」と述べ、企業が環境問題に積極対応する必要性を強調した。

#### 海洋プラでフリース生地

一方、東レとはまったく違ったアプローチで環境配慮型素材の開発を進めているのが、帝人子会社の帝人フロンティア（大阪市北区）だ。同社はフリースの代わりとなる生地素材「デルタTL」を開発、アパレルメーカーなどに売り込みをかけている。19年度には、前年に30万個だった販売量を50万個に増やす計画だ。

防寒着として広く普及しているフリースは、保温性を高める目的で、生地表面をけは立たせて熱がこもる空間を作る起毛加工を行っている。ただ、その際に表面をクシのようなもので引っかき出し、繊維を切断してしまうため、洗濯の際に繊維が流し出しやすい。これに対し、デルタTLはタオルなどに使われているパイル生地と同じ構造をしており、起毛加工を行わない。「洗濯時の毛落ち・流出が発生しにくい一方、フリース素材が



帝人フロンティアのフリース代替素材「デルタTL」で作ったパーカー

持つ保温性、柔らかい肌触りなどの特徴も備えている」（帝人）という。

海洋プラごみは、大きさが5ミリ以下の微小なマイクロプラスチックが「正体」とされるが、特に衣料品の繊維くずが海に流れ出し、魚などに取り込まれている可能性が指摘されている。帝人ではこの問題が消費者に広く知られ、問題視されるようになったことで、デルタTLの需要がさらに拡大するとみている。

一方で環境意識の高まりは、東レがペットボトルリサイクルを推進する原動力にもなっている。ファストリとロンドンで記者会見したのも、環境への配慮の有無が商品購入の決め手となりつつある欧州で、先進的な取り組みを消費者にアピールしたいと考えたためだ。会見に同席した東レの日寛昭広社長はあいさつで、「『素材には社会を変える力がある』と信じ、今後も長年にわたり取り組みを深化させていきたい」と意気込んだ。

(井田通人)

## 特別対談シリーズ 「グローバルの流儀」

(Vol. 33)

森辺一樹とゲストとの特別対談シリーズ『グローバルの流儀』。第33回のゲストは 不二製油グループ本社 清水洋史社長をお迎えての対談です。

## 地球と人の健康を支える未来創造カンパニー

植物油や業務用チョコレートなどを生産・販売する不二製油や、チルドデザートを中心とする洋菓子メーカーのトーラクなど、13カ国に34社を展開する不二製油グループ。大阪市北区に本社を置き、1950年の不二製油創立以来、取引先向けに食の素材の可能性を提案し続けている。1973年に海外へ進出し、グループ全体の売上高の約60%が海外売り上げ。業務用チョコレートの生産量世界3位を獲得するビジネスを展開しているという。代表取締役社長 清水洋史氏に、グローバルで成功を勝ち得た秘訣と今後の戦略を聞いた。

技術からマーケティング中心へ、時代背景に合ったビジネスモデルを展開

森辺：まず事業の概要と沿革をお聞かせいただけますか。

清水：当グループは、チョコレート用油脂をはじめとする植物性油脂や、業務用チョコレート、クリームやマーガリン、チーズといった乳化・発酵素材、大豆加工素材などを製造する食品メーカーです。当グループの最初の会社である不二製油は1950年に創立された、日本で一番最後に生まれた油脂メーカーです。海外進出は73年。現在売上高の約60%が海外での売り上げになりました。

森辺：貴社グループが数十年間で業界をリードする存在になった理由は何

だとお考えですか？

清水：昭和の時代には、我々は技術を磨き、西洋風の食品ニーズに商品を合致させました。平成に入るとコンビニ、スーパー各社がプライベートブランドの商品を展開するにあたり、当社が開発、製造を請け負うことで事業も拡大。時代背景に適したビジネスモデルを展開したことが勝因だと思います。

SDGsの達成に向け  
植物性食品素材で課題解決を図る

森辺：先日、貴社グループが業務用チョコレート会社の米プラマー社を完全子会社化したことで、世界第2位と競える規模の第3位の業務用チョコレート会社になったというニュースが流

れましたね。

清水：プラマー社の取得により、当社グループの売り上げの6割が海外になりました。プラマー社はサステナビリティを重視する立場から、カカオ産地の教育や福祉支援にも取り組んでいます。プラマー社を含めた今ある事業を伸ばすことに加えて、環境・社会・企業統治への対応により持続可能な社会を目指す経営を進めていくことが当社グループにとってのグローバル戦略になるでしょう。

森辺：最後に、貴社グループの今後の展望をお聞かせください。

清水：世界はSDGsの達成に向けて新たな時代を歩み始めました。地球環境の悪化による食糧危機が懸念される社会において、有限の資源を代替する技術はサステナビリティそのものです。こうした課題を植物性食品素材で解決し、社会に貢献する会社になりたいですね。当社グループは植物性油脂と大豆たん白(張業)を中核に、地球と人の未来を支え続ける未来創造カンパニーを目指します。



森辺 一樹  
スパイダー・イニシアティブ  
代表取締役社長

1974年生まれ。大手を中心に1000社を超える企業に対して、15年以上にわたるアジア新興国展開支援の実績を持つ、海外販路構築のスペシャリスト。



清水 洋史 (しみず ひろし)  
不二製油グループ本社 代表取締役社長  
1953年長野県生まれ。77年同志社大学法学部を卒業し、不二製油に入社。2004年同社取締役に就任し、06年不二製油(張業)有限公司 董事長兼総経理。09年に不二製油常務取締役、12年専務取締役を経て13年代表取締役就任。15年に純粋持株会社移行により不二製油グループ本社 代表取締役社長 最高経営責任者 (CEO) に就任し、現在に至る。

イノベーションズアイWEBサイトで全文掲載中!  
<http://global.innovations-i.com>